

稲作情報

秋田地域振興局 農林部 農業振興普及課

No.5

TEL:018-860-3410
FAX:018-860-3834

草丈:長い、茎数:やや多い、葉色:やや淡い

追肥は栄養診断に基づき慎重に判断！

1 気象経過と生育状況

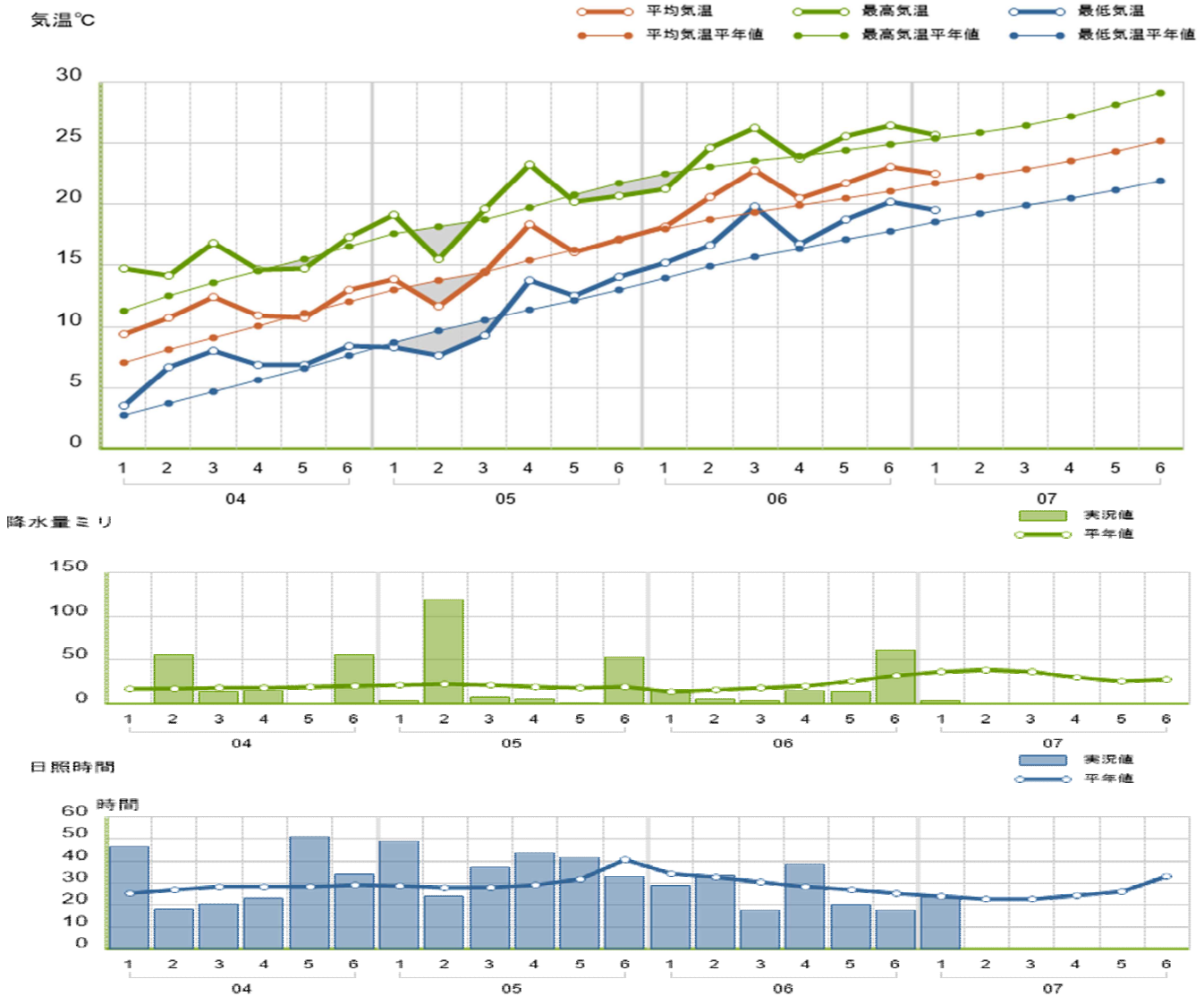


図 半旬毎の気象経過(4月1日～7月5日、アメダス秋田)

〈概況〉

6月2半旬以降、気温は高く推移したものの、6月の日照時間は平年より少なくなりました。

7月5日の定点調査結果(あきたこまち)は、草丈は59.7cm(平年比112%)と長く、茎数は505本/m²(同比103%)とやや多く、葉数は10.6葉(同差+0.3葉)とやや多く、葉色は43.0(同比98%)とやや淡い状況でした。ほ場間差が大きい状況となっていますので、ほ場ごとの生育状況に応じた肥培管理を徹底しましょう。

表 水稻定点調査結果(7月5日実施)

	本年	比較	
		平年比・差	前年比・差
草丈	59.7cm	112%	94%
茎数	505本/m ²	103%	126%
葉数	10.6葉	+0.3葉	-0.1葉
葉色(SPAD)	43.0	98%	87%

※管内定点ほ場9地点の平均値(あきたこまち)

2 中干しは幼穂形成期までに終了

表 アメダスデータを用いた「あきたこまち」の幼穂形成期予測 ※幼穂形成期：幼穂長2mmの時期（出穂25～30日前）

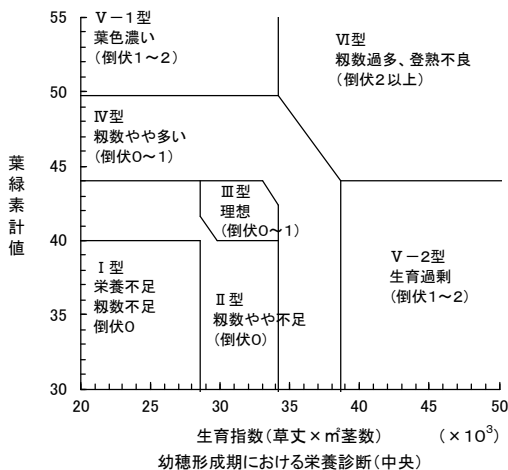
アメダス 田植え日	秋田		男鹿		五城目		大湊		岩見山内		大正寺	
	予測日	平年比	予測日	平年比	予測日	平年比	予測日	平年比	予測日	平年比	予測日	平年比
5月15日	7月6日	早4日	7月10日	早4日	7月8日	早4日	7月7日	早6日	7月10日	早3日	7月10日	早4日
5月20日	7月10日	早3日	7月14日	早3日	7月12日	早3日	7月10日	早6日	7月13日	早3日	7月13日	早3日
5月25日	7月13日	早3日	7月16日	早3日	7月15日	早3日	7月13日	早6日	7月16日	早2日	7月16日	早3日
5月30日	7月16日	早3日	7月19日	早3日	7月18日	早3日	7月17日	早4日	7月19日	早2日	7月19日	早3日

注)あきたこまち中苗移植、田植え翌日から7月5日まで各アメダス地点の平均気温実測値、それ以降は平年値を用いて推定。今後の天候によって予測日は前後する。平年比は田植えからの平均気温が平年値で経過した場合の幼穂形成期予測との差。

- 7月6日時点の予測では、あきたこまちの幼穂形成期はかなり早まる見込みです。
- 幼穂形成期に土壤水分が不足すると1穂粒数の減少を招くため、中干しは幼穂形成期前に終了し、間断かん水に切り替えます。中干しが十分にできなかった場合や、生育量が不足して中干し開始が遅れた場合は、中干し終了後の間断かん水で、落水期間をやや長めにし、徐々に田面が乾くよう努めます。直播栽培では転び型倒伏を防止するため、落水期間を長めにした間断かん水を行います。
- 減数分裂期から穂ばらみ期にかけて平均気温20℃以下(最低気温17℃以下)の低温が予想される場合は、冷害の危険性が増すため、幼穂形成期に入ったら水深10cm以上を深水管理(前歴深水管理)を10日間程度実施します。

3 あきたこまちの栄養診断(幼穂形成期追肥の判断)

- あきたこまちで幼穂形成期(幼穂長2mm、葉数11葉前後)を迎えている場合は、時機を逸せず生育・栄養診断を実施してください。草丈、茎数、葉色(葉緑素計値)のデータがあれば診断できます。
- 生育型がI型またはII型の場合は、窒素成分で2kg/10a以下を目処に追肥を行います。
- 幼穂形成期の生育型がVI型に該当する場合は、緊急処置として倒伏軽減剤の使用を検討します。
- 肥効調節型肥料を基肥などで使用した場合、追肥は施用済み窒素分量などを考慮し、慎重に判断します。



生育型	窒素追肥量(kg/10a)	
	幼穂形成期	減数分裂期
I型	2kg	2kg
II型	2kg	2kg
III型	ムラ直し1kg	2kg
IV型	なし	2kg
V-1型	なし	ムラ直し1kg
V-2型	なし	ムラ直し1kg
VI型	なし	なし

注)目標収量570kg/10a、あきたこまち

表 幼穂形成期(7月15日頃)における「あきたこまち」の理想生育量(県中央地域、稲作指導指針より)

	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数	葉色(SPAD)	生育指数 (×10 ³)	栄養診断値 (×10 ⁵)
理想値	61	515	10.7	42	31.4	13.2
上限値	63	559	10.9	44	34.2	14.7
下限値	58	471	10.5	40	28.6	11.8

注)生育指数は草丈×茎数、栄養診断値は草丈×茎数×葉色(SPAD)で算出

4 病害虫防除対策 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第3号(7月予報)より

① 葉いもち(予報:やや多い)

- 6月23日～24日の感染による葉いもちは6月30日頃から発生する予想される。
- ほ場を巡回し、余り苗や本田での発病状況を確認する。生育が遅れているほ場では肥効が遅れ、7月以降稲体の窒素濃度が高まり、いもち病への抵抗力が低下するので特に注意する。
- 余り苗はいもち病の発病の有無にかかわらず、直ちに泥の中に埋めて処分する。余り苗で発病が確認された場合、発病ほ場及び周辺ほ場では今後の発病状況に注意する。
- これまで葉いもち防除剤を使用していない場合は、直ちにオリゼメート粒剤を10a当たり2kg、またはルーチン粒剤を10a当たり1kgを散布する。
- 余り苗や持ち込みからの伝染を確認した場合は、直ちにブラシン剤またはノンブラス剤の茎葉散布を行う。その後、必要に応じてビーム剤を追加散布する。

② 紋枯病(予報:多い)

- 穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃期に茎葉散布剤で防除する。その際、薬剤が株元に到達するように散布する。
- 粒剤を使用する場合は、前年多発したほ場で本病を対象とした育苗箱施用剤を使っていないほ場に限る。散布時期はモンガリット粒剤が出穂20～10日前、リンバー粒剤が出穂15～5日前である。
- 粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は水を入れない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しをしない。

③ 斑点米カメムシ(アカスジカスミカメ)(予報:多い)

- 水田内に雑草が多発すると、アカスジカスミカメの水田内への侵入が助長される。そのため、ほ場の発生草種や生育程度を観察して、適切な中・後期除草剤を選択し、雑草防除を徹底する。
- 稲の出穂15～10日前までに農道や畦畔、休耕田等の草刈りを地域で一斉に数回行う。
- 水田畦畔刈り込み代用剤を7月上～中旬に散布すると40～50日の抑草効果が期待できる。

表 斑点米カメムシ類防除のための雑草処理体系

	6月		7月		8月			9月		
	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
本田防除					1回目防除 ←→ 出穂期10日後頃		2回目防除※ ←→ 出穂期24日後頃			
農道・畦畔	←→				←→ 草刈り			←→		
法面・休耕田	←→ 草刈りの徹底			草刈り禁止					←→ 草刈りの徹底	

出穂15～10日前までに数回行う。水田内のイネ科、カヤツリグサ科雑草の穂はアカスジカスミカメの発生を助長するため除草対策を徹底する。

1回目の茎葉散布剤の散布7日後までに草刈りを実施し、アカスジカスミカメの増殖源となるイネ科雑草の除去に努める。

稲の収穫2週間前以降から草刈りを実施する。

※ 出穂したホタルイ類等のカヤツリグサ科雑草やノビエが発生しているほ場やイネ科雑草が主体の牧草地・休耕田等に隣接するほ場、発生予察情報に基づき多発が予想される場合は出穂期10日後頃と同24日後頃の2回防除を必ず実施する。

◇次号は7月18日頃の予定です。